

ヒューム自我論における「知覚の所有者」問題

岡村太郎

0. はじめに

ヒュームの自我論は、自身がその不備を認めていることもあって、様々な形でその欠陥が指摘されてきた⁽¹⁾。その中には、自我論だけではなく、ヒューム哲学全体の欠陥が浮き彫りになるとの指摘もある(木曾, 1995, 616 頁)。それゆえ、これらの批判は、単にヒュームの告白が何であったかの解釈ゲームではなく、ヒューム哲学の基本的構造の不備の指摘であると考えることができよう。本論ではそれらの批判の中でも、知覚の所有者はどのように決まるかという問題に絞って検討する。本稿では、この問題は確かにヒュームの自我論の中では答えることが困難であるけれども、ヒュームの情念論にそれへの応答可能性が見られることを指摘したい⁽²⁾。

具体的な本論の流れは以下のようになる。1 節においてはヒュームの公式の見解、「知覚の束」説を概観する。2 節においては、「知覚の束」説はヒュームの意図と反して、知覚の所有者を確定できていないとする批判を検討し、それがヒュームの自我論における独我論的な方法にあることを見る。3 節においては、ヒュームの間接情念論、とりわけ「誇り(pride)」の発生メカニズムを概観し、そこにおける「誇りは自我の観念を生む」という枠組みが、「知覚の所有者」の決定に寄与することを指摘する。

1. ヒュームの「知覚の束」説

まずはヒュームが自我論において何を課題としているかを確認しよう。『人間本性論』⁽³⁾ (*A Treatise of Human Nature*, 1739-40、以下『本性論』とする)において、最も基礎的なデータとされているのは、印象と観念から成る知覚である。これら基礎的な知覚が経験によって連合されることで、われわれの世界認識は成り立っているというのが『本性論』の基本的な論調と言える。自我についてもこの論法は一貫している。ここで自我⁽⁴⁾とは「想像を絶する速さでたがいに継起し、絶え間のない変化と動きのただなかにある、たがいに異なる、知覚の束あるいは集まり」(T 1.4.6.4)であるとされる。この「知覚の束」説は、従来のデカルト的見解、すなわち「われわれは「自我」と呼ばれるものをどの瞬間にも意識しており、その完全な同一性と単純性とを、論証的明証性以上に確信している」(T 1.4.6.1)と主張する見解とは異なり、自我に対応する単一の印象は存在せず、知覚がただ集まって

いるだけだとヒュームは主張する。自我の観念とは常に現前しているわけではなく、「日常生活において、自我、人格の観念は、決してそこまで確定されたものではない」(T 1.4.2.6)というわけである。

ただ、『本性論』の他のトピックにも共通していることであるが、ヒュームは諸対象を知覚に立ち戻って説明しようとすることで、対象が存在しないとか、信じるべきではないという極端な懐疑的結論を主張しているわけではない。『本性論』の探求は、対象の存在を否定し去ることではなく、印象と観念から成る個別的知覚から、いかにして日常的な認識が成立しているのかを探るものである。

自我論においてもこれは同様であって、そこにおいて「知覚の束」を「自我」とわれわれが見なすような、それらを「私のもの」と見なすような知覚間の関係が探求されている。具体的には、知覚はただバラバラに乱立しているのではなく、その現れ方にある関係（類似 (resemblance)、因果 (cause and effect)）が見いだされる故に、「知覚の束」は私のものと見なされる。まず類似について。記憶によって現れた過去の知覚が、現在の知覚と「類似」して感じられるとき、「(思考の連鎖の) 全体を単一の対象の連続のように見えさせる」(T 1.4.6.18) とヒュームは言う。過去にリンゴを美味しそうだとした感覚と、今リンゴを美味しそうだとする感覚が似ているので、その過去の時点と今の時点の思考、感覚が「私」の知覚として感じられるということである。そして因果関係について。ヒュームによれば「人間精神についての真の観念は、(諸知覚が)たがいに原因と結果の関係によって繋がれ、たがいに他を生み出し、消滅させ、他に影響を与え、他を変様させるところの、たがいに異なる諸知覚、異なる諸存在者から成る、一つのシステム」(T 1.4.6.19) とされる。例えば、お腹が空いた、リンゴを食べたい、しかしお金がないのであきらめよう、という因果関係に立った一連の思考や情念、感覚は、一つのシステムとして感じられるものであり、私に属するものとして認識されるということである。以上のように、ヒュームの説明によれば、類似と因果という二つの関係に従って、それぞれの知覚が結び付けられる時に、ある知覚は「自我」を構成するものとして見なされるということになる。

以上確認したように、ヒュームの課題は日常的な自我の観念、すなわち諸知覚を「私のもの」としている事態を、知覚から構成し説明することであり、それは知覚間の類似、因果によって説明される。

2. 知覚の所有者問題

このようなヒュームの自我論によれば、ある知覚は、類似、因果という関係を介し思考において自然に感じられることで、その所有者は「私」であるということになる。しかし、

この説明では知覚の所有者は決定され得ないという批判がある。ここではこの「知覚の所有者」問題の概要と、それを招くことになったヒュームの自我論における方法を指摘する。

2.1 類似、因果という枠組みは、ある知覚が他人の知覚である可能性を排除できない

これまで見てきたように、ヒュームの課題は、われわれの日常的な自我観念の起源が印象と観念というデータから構成されていくさまを示すということであった。これに対してヒュームは知覚間の類似と因果という枠組みをもって答えたのである。Pears(1993)によるとこの「知覚の束」説は、自我の観念に本質的な「この感覚は他の人には起こり得なかった」という日常的な事態を説明できていないと批判する。

今まで見てきたように、知覚の所有者決定をヒュームの説で説明すると次のようになる。ある知覚は、過去の知覚と類似していたり因果関係に立っていたりすることによって、そのことが反省において感じられることで「私」のシステムの一部を成すものとなる。しかし Pears によれば自我観念の条件である類似性、因果性は、それが私に固有の知覚ではなく他人と共有している可能性を排除できないというのである。例えば、私が趣味で快いと感じるピアノの「音」の知覚があるとしよう。日常的に考えて、この音の知覚の所有者は私である。しかしながら、過去に聴いた音と今聴いた音が類似していたり、その音の観念が恒常的に快い感じを引き起こしたとしても、このことはその知覚を必ずしも「私の系列」の一部であると決定するものではない。それは単なる世界、対象の情報であって、必ずしも自分に特有のものではなく、他人と共有している可能性がありうるであろう。それゆえ、この類似と因果という枠組みは、知覚間の親密性や統一性を説明するが、「その知覚者が他人ではなく私であった」という情報を全く与えないのである。Pears の指摘するところによると、「知覚の束」説はヒュームの本来の意図に反し、「知覚所有者の決定」、つまり「この感覚は他の系列には起こらなかっただろう」という日常的直観を汲み取るものではない。

この知覚所有者を決定できないという問題は、自我論に特有のものであると言える (Garrett, 1997, pp.180-186)。物理的対象、例えばリンゴについては、形、色、光沢などの知覚をその空間的位置を手掛かりに「リンゴ」の系列内の知覚として確定できる。しかしヒュームは「知覚の束」の要素である思考、感覚を空間的位置を持たないものとして扱っている。それゆえ、それら思考は空間的位置を手掛かりには所有者が決定されえないのである。

2.2 独我論的な方法論

以上、「知覚の束」は親密な世界や対象の描写に留まっているのであり、その知覚の所有

者が「私」であることの説明にはなっていないという問題が概観された。この問題が指摘するのは、ヒュームの「類似」、「因果」という枠組みは、意識や思考の滑らかさを説明するものであって、「知覚の所有者」を決定する枠組みを欠いているということである。言い換えれば、他者と区別されるものとしての自我という要素を全く説明できていないということである。

Pears によると、このような問題を抱えてしまうのは、ヒュームが自我論において独我論的な方法、すなわち「精神に入ってくる知覚は全て私のものだ」という前提を持ち込んでいたからだという。ヒュームは自我を語る際、自らの内観に訴えるという方法をとっている。

私が注意を自分自身へ向ける時、私はこの自我を、一つあるいはそれ以上の知覚なしには、けっして知覚することができない。また、私は、これらの諸知覚以外には、けっして何も知覚することができない。それゆえ、自我を構成しているのは、これら知覚の複合である。(T App. 15)

1 節で示した通り、ヒュームの論法は、日常的な認識を、いかにして印象と観念というデータから構成されていくかを示すものであった。自我に関してもそれは同様であり、いかにして一つの自我が、印象と観念という基礎データから形作られるのかというのがヒュームの課題であるはずである。しかしこの文では、自我を説明するにあたって、説明されるべき日常的な自我の観念の内部にしか注目されていない。つまり、いかにしてある知覚の所有者が「私」となるかを考えるにあたって、検討する知覚は初めから私のものに限定されているのである。Pears の表現を借りれば、ヒュームは「いかにして一つの精神が生じるか」という問いを、「一つの精神の中で」行ってしまっている (Pears, 1993, p.296)。このような方法をとったために、「精神に入ってくる知覚は全て私のものだ」という前提を密輸入してしまったのである。それゆえヒュームの「知覚の束」説においては日常的な自我の観念の内部の整合性は説明されているものの、そのような「知覚の束」の所有者が誰か、その人称はどのようにして生じてくるのか、という問いには答えられないという事態が帰結してしまうことになる。

ここで、そもそもヒュームの自我論の目的は、前提された日常的な自我の観念の内部の整合性を問題にするものであり、知覚の所有者を定めるような議論をしていないと言われるかもしれない。Pears らが指摘した「知覚の所有者」問題はヒュームの探求の範囲外なのであり、そこを突いて批判するのはナンセンスだという批判はありうる。しかしながら、ヒュームは、単独の知覚のみではその所有者は決まらないということを述べている。

精神が、牡蠣の生命以下の状態に落とされたと仮定せよ。その精神が、渇きや飢えのような、ただ一つの知覚しかもたないと仮定せよ。そのような精神の状態を考察してみよ。あなたは単にその知覚だけではなく、それ以外に何かを心に抱くであろうか。自我や実体という考えを持つだろうか。(T App. 16)

最後二つの疑問文は反語表現であって、飢えや乾きを感じても、それらの知覚には所有者が示されないのである。ここから、所有者が決まっていく過程として、「反省における類似、因果による思考の被決定性」という枠組みが持ち出されるわけである。それゆえ、無人称的な知覚から、その知覚の所有者が決まっていく過程を説明することは、ヒューム自我論が取り組んでいた問題であったと言える。そもそも、精神に入ってくる知覚が直接「私」のものとなるのであれば、知覚が現れる場所は知られない (T 1.4.6.4) という主張と抵触することになる。それゆえ知覚の所有者問題にヒュームが答えられないのなら、その批判は受けなければならないと言える。

3. 「誇りが自我の観念を生む」と「知覚の所有者」問題

このように、確かにヒュームは、「知覚の束」説を提出するにあたって独我論的とも言えるような方法を前提していた。だがこのことでヒュームの自我論、ひいては哲学体系が全面的に否定される必要はない。というのも、ヒュームは間接情念論において、知覚の所有者を素朴に導入しない形で、それが決定されていくような道具立てを提示しているからである。

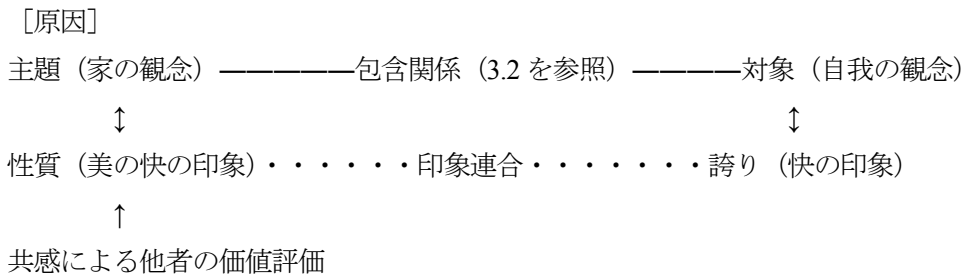
具体的な手順は以下のようになる。3.1 では、間接情念である誇り (pride) の発生メカニズムを概観する。この「誇り」という情念の発生において、「誇りは自我の観念を生む」という枠組みが採用されていることは注目に値する。3.2 では、誇りの条件となる「自我」とは、未だ所有者が決まっていない「親密な」知覚の束であることを確認する。そして 3.3 では、誇りの発生条件である「比較」に着目し、そこでの自らの「知覚の現れ方」を取り出す議論をヒュームの他の議論を参照しつつ検討する。以上から、ヒュームの与えられたテキストから、「知覚の所有者」問題には応答する余地があることを結論する。

3.1 「誇り」は自我の観念を生む

まずは「誇り」の発生メカニズムを概観しておこう。誇りは間接情念 (indirect passion) の一種に分類される。情念は「いかに多くの言葉を費やしても正しい定義を与えることは

できない」(T 2.1.2.1) ものであるが、間接情念は、他の性質、観念を介して「間接的に」生じるものであり、われわれは「情念に伴う諸事情を枚挙して、これによって情念を記述する」(同) ことができる。それゆえここでヒュームが行っているのは情念の内容を説明するのではなくて、その情念が発生する「因果的条件」を示すということであると言える。

その間接情念の「因果的条件」は以下の図のようになる。これにならって誇りの発生メカニズムを概観しよう。



誇りが発生するためには、「原因」として「主題 (subject)」、それに伴う主題の性質があり、その情念は「対象 (object)」として自我を持つのだとされる。例えば「私が自分の美しい家を誇りに思っている」という事態をこれに従って説明するならば、原因となる主題は「家」の観念であり、その性質は「美」の印象、対象は自我の観念である、という風になる。これら印象と観念のそれぞれの連合は相補的であるとされる (T 2.1.4.3)。ここで、主題の性質、すなわち家の「美しさ」の「二次的原因」として、ヒュームが「共感」という原理を提出していることは注目に値する。

ある情念が共感によって精神に注入されるとき、最初はただ結果によって知られるだけである。換言すれば、表情や話し方などにおける外的しるしによって知られるだけで、このしるしが情念の観念を精神に与えるのである。そしてこの観念はすぐに印象に転換する。(T 2.1.11.3)

「共感」概念については様々な議論があり、ここで詳しく検討することはできないが、さしあたりここにあるように他者の情念や思考を感じる能力であると言える。自分の所有物に対する他者からの価値評価を共感によって知ること、誇りという情念は発生するのである。(ただし「共感」の導入によって、ただちに知覚の所有者が無批判に導入されているわけではない。共感という能力自体は因果推論の一種にすぎず、知覚の所有者決定に本質

的ではない。後述するが、重要になるのは共感を介した「異なる相」の経験である。）

以上が「誇り」の発生メカニズムの概観であるが、ここでヒュームは自我と誇りの間に独特の関係を与えていることに着目しなければならない。

（誇り、卑下といった）情念は、喚起されたとき我々の視線を一つの観念へ向ける。その観念が自我の観念である。するとここで、情念は二つの観念の間に置かれることとなる。その一つは情念を産む観念であるし、他方は情念によって産み出される観念である。それゆえ、最初の観念は情念の原因を表し、第二の観念は情念の対象を表すのである。（T 2.1.2.4）

誇りの「対象」は自我であった。それゆえここで情念によって生み出されると言われているのは「自我」である。誇りは原因と自我の間に置かれるのだから、順番を確認すると、原因（美しい家）があつて、「誇り」という情念が発生して、自我の観念に注意が向けられる、ということになる。同様のことを指摘する記述として、以下のものがある。

人間の心の諸器官には、われわれが「誇り」と呼ぶ特異な印象、情動を産出するに適した性向が自然に与えられている。またこの情動にはある観念、すなわち「自我の観念」が自然に割り当てられてあつて、「誇り」という情動はこの「自我の観念」を必ず生み出す。（T 2.1.5.6）

この記述から同様に読み取れるのは、「誇りは自我の観念を生み出す」とあるように、「誇り」は「自我」の観念に先行するということである。われわれが誇りを感じる時、誇りは自我の観念に先立ち、それを対象として生み出すことになる。このように、情念発生の場面において、自我の観念は誇りに先立つのではなく、誇りに自我が「結果として」伴う、生みだされる、注意が向けられるとヒュームが考えていることがわかる。

3.2 誇りの条件となる自我と、誇りによって生み出される自我

以上、誇りが自我に先行するというヒュームの説明を確認した。しかしながら、ここには問題が指摘される。誇りが発生するためには、原因となる事物が自我と関係をもっていることの認識が必要なのであり、純粹に誇りが自我に先行するということとはあり得ないように思われるからである（Davidson, 1976, pp749-750）。確かに私が自分の立派な家を誇りに思う時、自分と家が何らかの関係にあることから、その家の立派さに快を感じるのであつ

て、全く自分と無関係な家があって、誇りという情念が生まれて、それから家と自分との関係が密接だと感じられるということは理解不可能に思える。ヒューム自身、「自我が考察に入らぬとき、誇りや卑下の起こる余地は全くない」(T 2.1.2.2) と述べており、誇りの発生条件に何らかの関係が必要ないとヒュームは考えているわけではない。

では、ヒュームの説明に厳密に従えば、Rorty(1990) の指摘するように、誇りの発生条件である自我と、誇りによって生み出される自我があることになる。誇りによって生み出される、時間的に遅れてくる自我は、「知覚の所有者」問題に答えるものとして 3.3 で扱う。ここではまず、誇りの条件となる前者の自我を見てみよう。誇りの条件となるのだから、快を引き起こすような対象と関係を持っているものでなくてはならない。この関係を、ヒュームは次のように表現する。

(誇りを生むような)これらの性質が内属する主題は、われわれ自身の一部であるか、われわれと密接な関係のある何ものである。(T 2.1.5.2)

このように、ヒュームは誇りの発生条件となる「自我」を、誇りの「原因」と対を成す項として考えているのではなく、原因を包含するものとして捉えているようである。次の文は誇りの原因として「身体」を考察している。

われわれが身体をわれわれ自身的一部分として考察するのであれば、身体を何らかの外的なものとみなす哲学者たちに同意するのであれば、私が先に述べたように、誇りと卑下の原因が必要とする、二重の関係をかたちづくるのに十分な程度に、身体がわれわれと密接に結合していることはやはり認められなければならない。(T 2.1.8.1)

この文においても、「誇り」の原因となる身体は、自我と独立の項を成しているというよりは、自我の一部、または切り離せない関係にあると考えられていることがわかる。それゆえ、ここから言えることは、「誇り」の発生条件である「自我」(これは Pears によれば自我と呼べないのであるが) と原因との関係は、原因が自我の外部にあるのではなく、自我の構成部分を成していると考えられているということである。それゆえ、この関係において、自我と原因がそれぞれ項として確定されねばならないという Davidson の言うようなことは求められていない。1 節で見た、滑らかな思考を伴った親密な「知覚の束」の一つを成すものとして、誇りの「原因」は理解されており、この関係こそが誇りの条件となるのである。

3.3 所有者のない「知覚の束」から「誇りによって生み出される自我」へ

ヒュームの公式の説明では、親密な「知覚の束」こそが自我なのであるが、Pears が指摘するように、その親密さだけではそれらの知覚の所有者は示されえないのであった。よって今見た「誇り」の原因を部分として持っている、誇りの条件となる「自我」は、親密に感じられるだけで、いまだ無人称的な「知覚の束」に過ぎないことになる。ここではヒュームの「比較」という誇りの条件に着目し、それを経た「誇りによって生み出される自我」の成立のプロセスには、知覚の所有者問題に答える可能性が見られるということを確認したい。

「誇り」が発生するためには、自らの知覚が他者のそれと比べて秀でていなくてはならない。ヒュームは誇りの発生メカニズムに五つの「制限」(T 2.1.6) を加えるが、その内の一つに次のようなものがある。

(誇りの原因となる) 快いあるいは不快な対象は、単にわれわれと密接な関係にあるばかりでなく、われわれ自身に特有なもの、または少なくとも、われわれが少数の人とだけ共有しているものでなければならない。(T 2.1.6.4)

たとえば「健康である」ということは私が親密に意識している、すなわち「知覚の束」を成す知覚であるけれども、皆が健康であるところにおいては、そのことは誇りの原因とはなりえない。「われわれは、対象をそれらに実在する内在的な価値からよりも、むしろ比較から判断する。」(T 2.1.6.4) のであって、自らに関係している対象の価値が他と比べて際立っているものでなければ、誇りという情念、それに伴う「自我の観念」は発生しないのである。他との比較から親密な「知覚の束」を見ることによって、その一部の知覚の、他に対しての優越性を意識することによって、誇りの情念は発生することになる。

しかし、知覚の束を成す知覚と他者の知覚を比較できるならば、すでに知覚の所有者は決まっているように思える。したがってここでは Pears の批判には答えずに、不注意に知覚の所有者を前提してしまっているように思える。説明されるべきはこのような比較が可能となる条件である。これに対しては、自我でなく他のトピックにも見られるヒューム哲学の性格からいって、このことを説明できるということを指摘したい。

まず確認しておこう。自分の知覚と他人の知覚を「比較」するとは、「ある通りのものとして現れる」、所有者のない知覚を、一つの視点、見方として相対化できるということである。例えば2節で見たように、知覚の束に含まれる「音」という印象は、その所有者を示すこ

となく知覚される。この「音」を他者の聴く音と比較するということは、「音」それ自体ではなく、その音の相対的な「聴こえ方」、「現れ方」が主題とされているということである。つまり、他者の知覚と自分の知覚を比較するには、その知覚それ自体でなく知覚の現れる「仕方 (manner)」が理解される必要がある。

これを踏まえた上で、他の哲学的トピックにおいて知覚とその「現れ方」の区別をヒュームがどう語っているかを見てみよう。たとえば空間の観念は、自我と論法は同じで、「ある仕方で配列された印象」に由来するとされる (T 1.2.3.4)。この知覚の集まりにすぎないものから、その空間的な関係、すなわち知覚の「現れ方」は、次のようにして抽象される。空間、延長の観念は、初めは可感的性質の複合体、例えば紫色をした点の集合に由来する。そこではその「現れ方」はその紫色と分離されていない。そこから「すみれ色、緑、赤、白、黒、またはそれらの混合色」(T 1.2.3.5) からなる対象を経験すると、色の特殊性を捨象し、それらの点の類似した「現れ方」が抽象され、空間的關係が直接主題となり得るのである。知覚の継起、例えば音の継起から成る時間についても、それら具体的な音が経験的に捨象されていくことで、時間という「知覚の現れ方」を抽象することができる (T 1.2.3.10)。抽象観念の本質を成す「類似」という知覚の現れ方も同様である。単一の「白い大理石の球体」の事例では、色と形を分離することができない。しかし「黒い大理石の球体」や「白い大理石の立方体」を経験すると、同じ「白い大理石の球体」を「異なる相において眺め」、その「類似性」(という知覚の現れ方) に目が向けられ、色と形を分離して考えることができるとされる (T 1.1.7.18)。

これらから読み取れるのは、「知覚の現れ方」を対象化するにあたって、あらかじめ明確にその「現れ方」という見方をもっていなくても良いということである⁽⁵⁾。そのような対象化は、異なる経験を経ることで初めて成されるのである。紫色の点のみからなる対象を見ているときは、空間的關係それ自体に着目することはできない。「異なる相」を経験し、その色が捨象されていく過程を経ることで、そこで初めて空間や時間の知覚の「現れ方」という観点が得られるのである。実際この議論が上手くいっているかは別として、ヒュームはそう考えていたと思われる。

これを自我のケースにも適用すると、「知覚の束」における知覚の「現れ方」を対象化するにあたって、あらかじめこの知覚を「私のもの」とであると明確に知っている必要はないということになる。空間時間、類似性と同じように、人称の無い「知覚の束」から、「異なる相」を経験していくことで、その知覚の現れ方が初めて対象化されるというふうに理解できるであろう⁽⁶⁾。

その知覚の現れ方、相対性は、他者に対するものであるのだから、この場合の「異なる

相」とは、共感を介した他者との交流の中に見出されるものであろう。ヒュームはそのようなメカニズムを自我論においては主題的に語っているわけではないので、ヒュームのテキストに沿ってその詳細なプロセスを描くことはできない。しかし、他のトピックにおける「知覚の現れ方」の抽象の仕方に倣うと、次のような形で描き出すことができるのではないか。例えば「知覚の束」を成す特定の「音」という知覚は、恒常的に快く感じられるが、そのことだけではその所有者を示していない。しかしその音について、共感を通じて得られる他者の判断との違いが意識されるとき—そのピアノの音がこちらには快く聞こえるのに、共感によって得られる情念が不快さを示しているとき—その音の知覚それ自体ではなくその「現れ方」が取り出されることが可能である⁽⁷⁾。つまり「知覚の束」説においては親密であるが無人称的な「音」という知覚があるのみであったが、ここでは共感によってその「音」という知覚の別の現れ方があることを知ることで、今現前している親密な音の知覚は一つの相対的な現れ方である、つまりこの視点に固有の見方であるということを知ることができるようになるのである⁽⁸⁾。自分と他者の知覚の違いをそこで初めて把握できるようになり、比較が可能になる。その知覚の現れ方の比較によって、(この場合その音楽に感動できる優れた感性として) 誇り (または卑下) という情念が発生し、その音という誇りの原因を、自我に特有のものとして考えることができるようになるのである。

こうしてヒュームの枠組みは Pears が指摘した「この知覚は他には起こり得なかった」という日常的直観を汲み取るものとなる。このように「誇りが自我の観念を生む」という枠組みは、自他の知覚の区別を素朴に導入することなく、それがまさに決定されていくプロセスを描く材料を提供しているように思われる。

4. おわりに

以上のように、ヒュームの「誇りが自我の観念を生む」という構図は、知覚の所有者を示す余地を有していることが示された。しかし、もちろんこれでヒュームにおいて知覚の所有者問題が完全に説明されたわけではない。ここでは「知覚の所有者」の決定をする要因として、共感を介した知覚の現れる「仕方」の対象化を提案したわけであるが、そのような具体的なプロセスが説明されるべきである。また、ヒュームが提示できるのは「誇り」を伴うケースであり、誇りを伴わない知覚をどのように「私」の知覚とできるのかが課題として残る。

これらの課題は本稿の範囲を超えているので、別の機会に譲らざるを得ない。本稿では少なくとも、従来の解釈者達によって指摘されてきた「知覚の所有者」問題を抱えているからといって、ヒューム自我論は完全に棄却されるべきであるというわけではなく、「誇り

は自我の観念を生む」とする間接情念論のメカニズムはそれに答えるものとして検討する価値があることを示せたのではないか。

註

- (1) Garrett(1997, pp.163-185) に詳しい。ヒュームの自我論の先行研究は、このヒュームの不満が何であったかを論じたものが多い。しかしその不満を表すヒュームのテキストが曖昧であるために、未だ統一的な解答は成されていない。本稿では、それらの論争には直接加わず、ヒュームの自我論に対する内在的な批判として「知覚の所有者」問題を扱う。
- (2) Baier(1991) に代表的なように、虚構的な「知覚の束」を補うものとして、情念論に着目する研究はいくつかあるが、「知覚の所有者」問題に特化して、情念論を扱うものは多いとは言えないように思われる。
- (3) 『人間本性論』からの引用では、ノートン版 (David Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. D. F. Norton & M. J. Norton, Oxford University Press, 2000) における巻・部・節・パラグラフの番号を順に表記し、(T 巻,部,節,パラグラフ)と示す。Appendix からの引用は、(T App. パラグラフ) という形で示す。訳出に際しては、木曾好能訳『人間本性論第一巻 知性について』、石川徹・中釜浩一・伊勢俊彦訳、『人間本性論第二巻 情念について』を適宜参照した。
- (4) ヒュームは、「思惟または想像に関わる人格の同一性」と「情念と気遣いに関わる人格の同一性」を区別しており、集中的な説明がされていて、より基本的な枠組みを提供しているのは前者である。この区別について、ヒュームはその詳細な区別の意味を詳細に語らないが、ひとまず前者が「知覚の束」として説明されているもので、後者が情念の対象として扱われているものであると考えることができる。
- (5) Costa(1998) がこのことを指摘している。
- (6) 知覚の集まりとその現れ方である空間の観念が本質的に別のものではないように、「知覚の現れ方」を自我論に導入することは、「知覚の束」説と矛盾しない。
- (7) 3.2 で扱った、無人称ではあるものの「誇りの原因が知覚の束と結びついていること」が誇り発生の必要条件であることがわかるであろう。(誇りの原因である) 音と快の恒常的因果関係の認識なしに、別の「知覚の現れ方」の異質性を感じることはできないように思われる。
- (8) この論点については、野矢 (1995, 第三章) を参考にした。

文献

- Baier, A. (1991). *A Progress of Sentiments: Reflections on Hume's Treatise*, Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- Costa, M. (1998). 'Hume on the very idea of a relation', *Hume Studies*, 24, 1, 71-94.
- Davidson, D. (1976). 'Hume's cognitive theory of pride', *The Journal of Philosophy*, 73, 744-757. (2011, 相松慎也訳, 「誇りに関するヒュームの認知理論」, 『思想』, 第 12 号, 356-374 頁.)
- Garret, D. (1997). *Cognition and Commitment in Hume's Philosophy*, New York: Oxford University Press.
- Hume, D (2000), *A Treatise of Human Nature*, D. F. Norton & M. J. Norton (eds.), Oxford: Oxford University Press.
- (1995, 木曾好能訳, 『人間本性論第一巻 知性について』, 2011, 石川徹・中釜浩一・伊勢俊彦訳, 『人間本性論第二巻 情念について』, 法政大学出版局.)
- Pears, D. (1993). 'Hume on personal identity', *Hume Studies*, 19, 2, 289-299.
- Rorty, A. O. (1990). 'Pride produces the idea of self: Hume on moral agency', *Australasian Journal of Philosophy*, 68, 3, 255-269.
- 木曾好能 (1995). 「ヒュームの理論哲学」, 『人間本性論第一巻 知性について』, 法政大学出版局, 367-616 頁.
- 野矢茂樹 (1995). 『心と他者』, 勁草書房.

[京都大学大学院修士課程・哲学]